



あおほのうた
第22号
菊陽町立菊陽南小学校
校長 渡邊浩文

二月は逃げて三月は去るのか？
しかし春はもくもくやっとなって来る！

一日一時一分一秒、時間は止まらない！！

朝の登校指導の話。「六年生が登校班と一緒に来るのは、あと何日かな？」と尋ねると、「十六日です」と素早い返事。さすが六年生、しっかりとカウントダウンができ

ている。中学校への準備も大丈夫みたいだなと感じました。
でも、続けた言葉。「さみしいです、もっとたいたいです。校長先生、菊陽南中学校をつくって下さい！」

校長ナベちゃんのみちのくひとり旅日記 その12

南リアス線の旅、およそ50分間。終点の盛駅に午前7時20分到着。大学時代の後輩が車で待っていてくれた。前日、突然電話で連絡したのだが、自分の予定を変更して駆けつけてくれたのだ。自宅は一関市。後日、よくよく調べてみると、この駅まで、車で1時間半はかかる。朝の6時には自宅を出たことになる。わざわざスケジュールを空けて時間をかけて、来てくれた。私が大学4年の時の1年生。同じサークルで、同じ学生寮の同じ部屋で、いわゆる同じ釜の飯を食べてきた仲である。

大学を卒業して、一度だけ会う機会があったが、もうずいぶんと会っていなかった。顔を見せた瞬間、とても喜んでくれた。「よく来てくれました、よく電話してくれました！」と、抱きついてきた。こんなに喜んでくれるなんて・・・、思わず涙が出てきた。やがて60にもなろうとするオヤジが二人。ほとんど人がいない駅前広場で、涙目で笑いながらスマホで自撮り。傍目も気にせず、学生時代に戻っていた。

ここからは、その後輩の愛車が移動手段となり、私の一人旅が彼と一緒に二人旅となったのだ。移動スピードは一気に上がり、三陸海岸線を南下するのだった。

盛駅から海へ向かう。是非見ていって下さいという後輩の願いでもあり、私の目的でもある、海岸線の様子がよく見える道を走る。やがて車は広田半島の付け根にさしかかり、陸前高田市にはいる。ここが、彼の故郷である。

あの震災のあと、一度電話をしたことがあった。彼の自宅は一関という内陸部にあったので無事なはず。しかし、実家はどうなったのだろう。そんな不安な気持ちで電話した事を覚えている。話をする中で、もう故郷の陸前高田は無くなってしまいかもしれませんと言葉を絞り出していた。その陸前高田が目の前にあった。夏の朝の日射しを浴びた田圃に、青青とした稲が空に向かって一斉に伸びていた。

震災前あるいは震災当時の様子を、現在の風景から想像することは難しい。私には、何も無い田園風景はのどかなものにしか映らない。しかし彼にとっては、震災直後の悲惨な眺めも、かつてあった懐かしの風景も、同時に見えているはずである。

広田半島の付け根の中ごろに陸前高田市立小友(おとも)小学校があった。日曜の朝、誰もいないが、玄関まわりなどきれいに整備されている。車から降りて校舎に近づいてみる。体育館の入り口にプレートが張り付けてある。津波到達水位、地面から1.8m。海拔にするとなんと13.5mの津波が襲ったことになる。この学校の位置は半島の中央部だが、東は門乃浜湾、西は広田湾につながる平野の端である。津波はその両方の湾から侵入し、学校の目前でぶつかった。ぶつかり合うことで津波はさらに高さを増し、学校に襲いかかったと、海を眺めながら、後輩が話してくれた。校舎の一階部分は水没し破壊され、津波が引いた後は、瓦礫が散乱し、文字通り足の踏み場もない状態であった。当時の記録画像を見ると、被害の大きさに言葉も出ない。

陸前高田市の当時の人口は約24,200人に対し、1,700人以上の人が亡くなったり行方不明となったりしている。岩手県では最大の犠牲者数となった自治体である。しかし、この小友小学校をはじめ、全壊、半壊、水没した小中学校はたくさんあったが、学校にいた児童生徒、教職員の犠牲者は一人もいないのである。先に「釜石の奇跡」も紹介したが、ここにも明日を担う若い命がしっかりと守られ、生き抜いていたのだった。

そこから10分も走ると彼の実家があった。一人暮らしのお母様に温かい朝ご飯を作っていただいた。(続いていいものか・・・)

なるほど小中一貫校は時代の最先端・・・じゃなくて、よっぽど卒業前の日々が充実しているのでしょうか。南小全部の学級がもう少しこのままでもいいと思っても、時間だけは止めることができません。悔いを残さないように過ごして欲しいと願うだけです。菊陽南中学校の構想は次の世代に引き継ぐことにして、春の訪れと同時に、きれいなスタートを見せて下さい。
なわとび集会！
〈写真が載せられませんでした。次回にでも(´;ω;｀)と言った手前、是非でも写真を載せます！



行事。一年生から六年生まで全員が、雰囲気だけでも感じていただけると有り難いです。
転び方の基本(?)から教えていただきました。
転んでも身体の小ささ、柔らかさでほとんど痛くなさそうな低学年。六年生になる頃には結構滑るようになるもの。わ



この日の給食には海藻サラダが・・・私はみんなに教えました。スケートは緊張してはだめ、余計な力は抜いて、リラックスして、愉快そう(カイスウ)に滑るのがコツだ。子どもからは、大丈夫です。快走(カイスウ)してみせすと、返された。脱帽！